

プログラム・ノート

矢澤孝樹

ヴァイオリンとハープ。弓奏、撥弦それぞれの分野で華やかな独奏の役割を託される弦楽器だが、両立には難しさも伴うのか、両者の共演作品は多くない。それだけに白井圭と吉野直子、2人の名手の共演はまさに「特別な庭」だ。プログラムは貴重なオリジナル曲と、3種類の異なる編成からの編曲作品。多彩な世界が2人の共演によってタイトル通り「満ちていく彩り」となるプレシャスな時間を愉しみたい。

まず18世紀英国の大家ジョージ・フリデリック・ヘンデル(1685～1759)の**ヴァイオリン・ソナタ イ長調 HWV 361**(1727年出版)。当時の独奏の相方は通奏低音(和声を示す数字が付された低音パート)。低弦楽器や鍵盤楽器(この場合は数字を基に奏者が和声を充填してゆく)が受け持ったが、ハープがこのパートを奏でることで、ヘンデルの大らかな歌と踊りが眩い彩りを身にまとうことだろう。

続いて舞台は20世紀に飛び、ニーノ・ロータ(1911～79)の**ソナタ**(1937)。ロータは『道』『甘い生活』『ゴッドファーザー』等の映画音楽で有名だが、前衛に与せず調性の範囲内で多彩な演奏会・舞台用作品を残した。本作のオリジナル編成はフルートとハープ。田園風の始まりから軽快で新古典的な終楽章まで、当時「イタリアのラヴェル」とも評された透明な音調に、ほのかな古代趣味が香る。

ここからはポピュラー名曲の編曲。まずウィーンの名ヴァイオリニスト／作曲家フリッツ・クライスラー(1875～1962)の、『美しきロスマリン』と共に「ウィーン三部作」を構成する『**愛の悲しみ**』『**愛の喜び**』(1905出版)。ヴァイオリンとピアノのオリジナル編成で私たちが馴染んでいる「ウィーン風味」がどう色合いを変えるか。そしてクロード・ドビュッシー(1862～1918)のピアノ曲、『**レントより遅く**』(1910)と『**夢**』(1890)。ドビュッシーのピアノ曲はハープでもよく奏でられるが、両者共演により旋律と響き双方の領域が一段と広がることだろう。

締めくくりはカミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)の**幻想曲 イ長調 作品124**(1907)。プログラム唯一のヴァイオリンとハープによる作品だ。両楽器の奏者である姉妹のために書かれた。切れ目ない複数の部分からなる。作曲者晩年の古典的に澄んだ世界で、後半のアンダンテ・コン・モートから始まる部分ではバロック期によく用いられたシャコンヌ(繰り返される低音パターンに基づく変奏曲形式の舞曲)も現れる。2つの楽器は互いを引き立てつつその持ち味を十分に発揮し、「彩り」の最後のピースが満たされる。